

研究経過報告（～90年9月）

斎藤和志

1989年5月に着任して以来、十分な研究成果をあげたとは言いがたく、それを報告することにためらいを覚えていた。本来第36巻に載せるべきものを若干含め、以下に報告する。

1 分担執筆

① 家族集団の特徴・父—母—子間の相互作用 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編） 社会心理学パースペクティブ2—人と人とを結ぶとき— 誠信書房 Pp. 195-206.（第9章第1節・第2節）

長田雅喜（編）『家族関係の社会心理学』（福村出版）の一節を執筆する機会を得てからの関心事である。原稿の執筆に着手したのはずいぶん前であり、いまさらという感じもする。実証的研究として学会発表も行ってきたが、そのひとつをまとめたものが本紀要の『きょうだい間の対人的態度に関する研究』である。

② 媒体利用のコミュニケーション 原岡一馬（編） 人間とコミュニケーション ナカニシヤ出版 Pp.68-78.（第4章）

原岡教授の下に集うこの地区の社会心理学研究者が『人間とコミュニケーション』の統一テーマで執筆した。当初は別の章を担当予定であったが、よんどころない事情でこの章の執筆となった。極めて不十分な内容であったと反省しているが、一つの新しいテーマが増えたような感じが個人的にしている。

③ 職場の人間関係 対人行動学研究会（編） 対人行動学ガイド・マップ ブレーン出版 Pp.66-67.（IV—6）

2 論文

① リーダーの人材育成機能—部下の管理的能力の形成を中心として— 経営教育年報, 8, 151-156.

② CI活動が従業員の組織に対する態度とイメージに与える影響について—組織コミュニケーションとしてのCI活動の視点から— 経営行動科学, 4, 111-122. 若林 満・中村雅彦と共著。

③ CI活動と従業員の仕事意識に関する研究 日本労務学会年報（第19回大会）, 99-105. 若林 満と共著。

④ 態度形成, 説得的メッセージ, 情報源の専門性が態

度変容に及ぼす効果—熟考尤度モデルと態度形成理論に基づく検討— 心理学研究, 61, 15-22. 中村雅彦・若林 満と共著。

⑤ CI活動と組織内コミュニケーション 経営教育年報, 9, 102-107.

3 学会発表・その他

① 原子力発電に関する知識, 説得的メッセージの一面性が態度変容に及ぼす効果 東海心理学会第38回大会発表論文抄録集, 31. 中村雅彦・若林 満と連名。

② CI活動と組織内コミュニケーション (1), (2) 東海心理学会第38回大会発表論文抄録集, 32-33. 若林 満と連名。

③ 組織の広報活動とコミュニケーションに関する調査報告書—CI活動との関連を通して— 経営行動科学研究会刊 若林 満・中村雅彦と共著。

④ CI活動と従業員の組織に対する意識 (1), (2) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 215-218. 中村雅彦・若林 満と連名。

⑤ 原子力発電に関する説得と態度変容—実験的検討— 産業・組織心理学会第5回大会発表論文集, 38-40. 中村雅彦と連名。

⑥ 組織内コミュニケーション過程としてのCI活動 (I) (II) 産業・組織心理学会第5回大会発表論文集, 80-85. 若林 満と連名。

⑦ 先端技術に対する態度の変容(3)—原子力発電に対する態度形成と説得的メッセージの高圧的表現が態度変容に及ぼす効果— 経営行動科学研究会刊 若林 満・中村雅彦と共著。

⑧ 青少年育成の問題と親の意識—大都市と地方都市との比較— 文部省特定研究「教育の場における相互作用の実証的総合研究」報告書, 119-132. 原岡一馬と共著。

⑨ 企業・技術イメージの変容に関する調査研究報告書—CI活動開始1年後の変化を中心に— 経営行動科学研究会刊 若林 満・中村雅彦と共著。

⑩ 原子力発電に対する態度形成と説得的メッセージが態度変容に及ぼす効果 産業・組織心理学会第6回大会発表論文集, 65-67. 中村雅彦・若林 満と連名。

- ① CI活動は組織イメージを変革できるか：導入一年後のフォローアップ（Ⅰ）、（Ⅱ）産業・組織心理学会第6回大会発表論文集，74-79. 若林 満と連名。
- ② CI活動と従業員の組織に対する意識（3）——CI活動開始1年間の変化を中心に——日本社会心理学会第31回大会発表論文集，174-175. 若林 満と連名。

『個人のもつ志向性が状況認知および意思決定に及ぼす効果』という研究課題で日本学術振興会特別研究員の採用内定をなんとか得ると同時に着任したため、辞退することとなった。振り返ってみると、まるで研究課題まで辞退してしまったかの印象を受けてしまう。周辺的な問題と中心的問題との統合を目指しつつ、研究に取り組んでいきたい。

研究経過報告

吉崎 一人

個人研究について概要をのべる。

1. 「学習経験による処理半球優位性の移行」について
- ・“Shift toward left visual field advantage after learning experience”の*The International Journal of Neuroscience*への掲載が認められ、1990年内に掲載されることが決まった。
 - ・学習経験と大脳半球機能差との関連についてのレビュー並びに各論文についての評価、さらには自らの研究結果のまとめ等を含んだ論文を完成させた（本学部紀要「学習経験からみた大脳半球機能差」）。
 - ・関西地区で行われている学習理論研究会（代表者北尾倫彦先生）で、「学習経験からみた大脳半球機能差」というテーマで研究発表させていただき（1990年8月）、有益な示唆が得られた。

2. 左右半球のコントロール機構の働き

- ・左右半球での情報処理の制御機構についての新たなモ

デルにそって、いくつかの実験を5月より開始している。

結果の概要並びに、具体的なモデルについてここで紹介することはできない（学会発表さえしていない）。というのも、データがまだ不十分であることに加え、モデル、パラダイムについて、再熟考する必要があるためである。

確かに左右半球での統合過程や制御過程については、ラテラルリティ研究のここ数年の流れに沿ったものではある。しかしながら、洗練されたモデルや実証的な報告はまだされておらず、自らのデータを提出するまでには、時間をかける必要があるだろう（途中でつぶれる可能性も高い）。

また当然のことながら、このテーマはこれまでのテーマとの関連性が強く、将来的には統合された研究テーマとして進めて行きたい。

研究経過報告

池田 博和

登校拒否問題に関しては、昨年度の教育学部心理教育相談室紀要に「登校拒否に関する研究、第Ⅳ報・身体性の問題、その1」を載せたが、その後の展開が残されている。登校拒否研究会としては、これまでの経緯をそろそろひとつにまとめようという動きになってきている。「共通感覚」論を軸にした総括、母親面接の問題、家庭教師的接近の方法等を含め、われわれ独自の立場を明確化できればと思う。来年の春頃が目処になろう。

同紀要には「思想としてのカウンセリング」と題する巻頭言を執筆した。末期患者へのカウンセリング等、重いテーマを取り上げたが、私としては正面きってカウンセリングとは何かという問題を論じたのは初めてであり、多少面はゆいところもあるが、やはりそう考えざるをえないものとして明確化できる機会となったことは幸いであった。

「生徒の自主性・自律性を育てる教育」については、